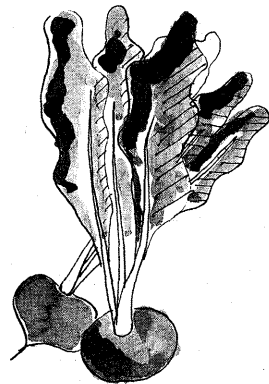


保育現場で感じること

〜自己中心主義をテーマに〜

上坂元 絵里



私達の園では、現在、基本的にはクラス担任は持ち上がり制をとっています。五歳児の三学期ともなると、二年間あるいは三年間共に生活してきた子ども達の成長ぶりに、思いを深くするとともに、保育者の力不足で子ども達に、充分伝えられなかったことの多さにジレンマもたくさん感じ、申し訳ない気持ちでいっぱいになります。

五歳児ともなると、驚くほど言語的コミュニケーションも豊かになってきますが、そんな子ども達とのやりとりの中で、ジレンマと裏腹に、自分自身の言葉や態度の

中に、「押しつけがましい」とでも言うべきものを感じることが多かったのです。

「押しつけがましい」ということは、相手が自分の思うとおりに行動することを当然と考えるような、自己中心主義的な発想にもつながるのかと思います。

そこで、幼稚園という集団社会における自己中心主義の問題を考えると、幼児自身、保護者、保育者という三者について考えることができるかと思えます。

幼児期は、人間としての価値観の基盤が作られる、とても重要な時期です。とはいえ、幼児自身はまだ人間形

成の途上にあり、自己中心性は、この時期の特色として自然ともいえるでしょう。周囲がまだよく見えていないところがあり、自分の考えだけが正しいと考えやすいようです。一方で、判断の基準となる知識や経験もまだ少ないので、周辺にいる人の影響をとて強く受けます。模倣をとおして身につけていくことも多いので、親や保育者の行動の仕方、考え方、ひいては人としての在り方

等が、彼らの価値観に非常に重要な影響をおよぼします。

まず、子どもの自己中心性はそれ自体、肯定的に受けとめたいと思います。その上で、子ども達か、他者を思いやる心をもち、客観的な判断力を備えた人になるように関わっていききたいものです。

ただ、最近感じるのは、幼稚園の時期に、他者への思いやりをあまり早急に求めすぎる、大人の側の「押しつけがましき」には、細心の注意を払う必要があるように思っています。

泣いている友だちに気づいて、「どうしたの」「かわい

そうだね」と言えることはすばらしいことです。ただ、子どもの行為には、まず形から入っていく面と、気持ちとして感じて動いている面と両面があるようです。

「かわいそうだね」と言えたことばかりを大人がほめると、子どもは形として言うことばかりを身につけてしまいかもれません。

保育者としては、子どもの行為を評価するのではなく、その子どもが友だちの気持ちによりそおうとした、あるいは、よりそうことができた心の方をしっかりと、感じとってあげられたらと思います。そして、子ども達の周囲にいる大人達がどう自己中心主義をのりこえていくかということがより大切に思います。

核家族で暮らす人の多い都会にあって、子ども達の背後にみえる親、特に母親が、とても視野が狭く、自分の子どもしか見えていない、見ようとしなないといったことがよく話題にのぼります。ちょうど運動会の日、ビデオカメラをのぞいて我が子ばかり必死で追いかけている様子に、例えられるかもしれません。

親、ここでは特に子どもに近い存在として母親を考えるとき、母親は「子どもを内包した自己」の幸せを最優先する、自己中心主義に陥りやすいように感じます。自分（わが子）さえ良ければということですが、ただし、ここでは、わが子を自分の所有物のように考えてしまいがちという二重の問題点もあります。本当の意味で自己を確立することが難しい現代社会、しかも受験等の競争社会の中で育ってきた母親は、時に、子どもの姿をかりて、自己達成感を味わおうとしてしまいます。自分の子どもを他の子どもと比較し、少しでも優れること、先に成長することを重視しがちです。

一方で、現代は、世襲制度が残る職業も少なくなりまして、子どもを一人の個人として尊重するという考えも随分、浸透しているように思います。けれども、子どもを尊重するという意味が少しずつ減ってしまい、必要なところが不十分な場合や、放任主義になりやすいという場合もしばしば見られるようです。「叱らない」子育て観も定着した様ですが、子ども達の話の小耳にはさむ限り、

まだまだこわいお母様も多いようで、叱ってはいけないと自分を抑えずぎてかえって、最終的には感情的な爆発をおこして子どもに対してしまうのではと、推察したりします。「叱らない」のではなく「叱り方」を考えることが大切なのでしょう。責任をもって判断し、行動できる人間となるように、価値観を作り上げていく援助として「叱る」ことが大切で、大人の考えを押しつけがましく、あるいは感情的に叱ることは避けるべきなのだと思います。また、子どものためという大義名分の裏に、親の自己満足が優先されていないか、子どもの成長を喜ぶといえながら、親の榮譽として自己満足になっていないか、といったことを自問してみることが大切のように思います。

父親の子育てへの参加がすすむ状況の中で、こうした傾向への歯止めになることが、子ども達よりよい育ちにつながることでしょう。

最後に、保育者自身について考えると、例えば組担任制をとっているような場合、保育者自身も自分の組を内

包した自己中心主義に陥りやすいことがあげられます。

例えば、私共の園でも、担任自身が他クラスの子ども達に可能な限り心を向けること、他クラスの子ども達の活動にも積極的に参加関与していくことが、子ども達に大きな影響をもつと思われまます。

子どもの自発性を大切にする保育といっても、子ども自身の内面から発するものと同時に、広く他者と触れ合う中から発するものがあるわけで、他クラスの活動にも敏感なアンテナを保育者自身、そして子ども達ももてることで、非常に遊びが豊かにもなります。

さらに、保育者としては、私自身の反省で考えてしまいますが、教師という役割を担い教育的配慮に努めながら、いかにそれを子ども達には直接感じさせずに接することができるといことがとても大きな課題と思えます。優しいけれど、子ども達に必要なしつけを伝えられない、あるいは、厳しいばかりで子ども達にとっては恐ろしい、わずらわしいというのではなく、優しいけれども、さりげなく大切なことを伝えられる保育者になれた

らと思えます。

年長組で教育実習をした時でした。お弁当の準備中に、一人の女児が私にしきりに話しかけていました。話を聞きながらも、「今、お友達何してる」と言うと、その子はあつと気付いて仕度を始めました。直接、「仕度をしましょう」と言うより、よく伝わったようその時は良かったと思つたのですが、こうした言葉かけも保育技術的になると、子どもに自分で気付かせるという押しつけがましさを増してしまうようです。

とはいえ、親が自分の子を誰よりも可愛いと思うことと、担任が自分の組の子を大変にいとおしく思うことは否定されるべくもないことで、要はバランスを失わないことかしらと思えます。

「心から」「心のままに」子ども達と接していきたいのと改めて思いながら、また、明日をすごしていきたいものです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)